

の封書を頭にて指す外、紙摺手せりき中尉は簡単に諸君に語り、卓上の書面の表裏を再三讀返せし後、然らば「ステッセル」部統に敬禮を表して室を捨てたり、都統官なく余等又音なく中尉を見送りせるのみ若斯く不吉の使ならざれば余等は中尉を或は勵まし或は賞す可かりしに此際如何にして中尉に言をなし得可きか開城申出の使者「マルテン」中尉室を出でたり嗚呼余等は降伏せるなり旅順は此時陥落せるなり余が六十年間の生涯の縮寫は形を留めざる可く滅びしるなり強ひて抑へし胸中の暗鬱何時しか顔色に現はれ音聲に表はれ果は語り去り語り来りて慷慨長息するのみ旅順守備最後の將官會議は斯の如き哀れのものにてありき起憶す余等は戦争の初より今に至る迄余等の運命は斯の如き態に陥る可しとは信ぜざりき余等最初の程は日本軍降伏の申出に關して露國將官會議開かる可きを信ぜり爾後露軍の勢海に陸に悲運を傾き昨年九月頃日軍より軍使來りて降伏を進めしも余等は奴輩何を云ふ見よ旬日を出でずして爾が一角を破り去らんと期せり更に旅順守備の運命大に窮し來りしに及んで必ず陥落の免る可からざるを信ぜしも余等は其不幸を見ざる間に戦死すべきを念じたり然るに谷間を降る如く漸次家財を削去られ余等の運命更に數歩ならずして俘虜の辱めを受けざる可からざる間れり「マルテン」中尉を見送れる余等は死せるが如く僅に椅子に身を支へ無言なりしが都統は此時形容し得べからざる態度を以て而も悲愴の音調を以て低聲に將官會議了れりと一句を宣せり右にて旅順最後の會議は終を告たり此後の事は別に語を要せず君諒せよ

### 海 事 雜 報

●日露海戦記(全一冊)附録日露海戦々域明細大海圖) 日露の海戦は戦事に海軍に新教訓を中外に與へたること多大、將た未見の大文字を以て當世紀の史上を飾るに足るの活史料を史家に寄與したるものなれば、先づ日露海戦記の完全なるもの帝國に刊行せられざるべからずと、吾人が昨年来肚裏に期したる一事也、果せる哉海軍勳功表彰會亦吾人と見る所を同ふしたるにや、茲に前編の二書を編著し吾人の机上に寄せ來たり、把つて見るに六百餘頁の一大書にして貴顯の御肖像を始め有らゆる海軍將官將校の肖像並に海上實戦の眞影、有名之戰艦艦旗艦艇沈没状態の實景等を寫眞版として口繪と爲し且東郷島嶼兩大将、上村坂本兩中將の題字を以て巻頭を飾れり海戦々圖の圖解日露海戦日誌の二者を巻首に見て先づ此著書の杜撰のものにあらず又素人の手に成れる此種凡百の書類と匹儔を異にするものたるを知るべく、而して全部を前記本記後記の三大部に分ち前記には日露國交の破綻の事情成行等を公平簡明に記述して開戦の由來を知らしめ、備本記に入つて第一編「戰勢決定時代」に於る日露海軍力の比較より脱き起し、聯合艦隊の出動に交戦の端を啓き「仁川港外の海戦」より始めて筆を電光石火の間に驅つて此未曾有の大海戦を精細に著實に快活に叙述したり而して著筆を苟くもせず文字悉く素人の手に成りたるものらしく海戦上に違法の文字なくして一に規律に依つて筆を操縦したる處、是れ則ち此書の命なるべし、其挿入したる海戦圖の如き何時より何時に至る圖、何時より何時までの状態と記明して時々刻々戰況の變遷を示せし如きは到底素人の

の出來ざる仕事にして實戦参加將校等の此書の編著に助力したるの甚深なるを察知すべし、後編に至つて凄惨の風雲始めて收まり「日露國交の回復を叙し」附録に「旅順開城會議狀況」を収めて此一書の完結を告げたり、而して更らに此書の附録として「大海圖」一貼を添ゆ亦た尋常一様の海圖にあらずして出版人自ら天下の絶品と記せるも敢て自負誇大の言にあらざるを見るなり、出版界煩擾にして而かも其書の寥寥たる今日、吾人は稀れなる此一書を見て轉た神氣の颯爽を覺え、今や秋冷稍催して、夜々燈火に親むの時節、吾人は此書を採つて讀書家の机上に推薦するに躊躇せず。尙ほ委細は本誌に掲ぐる廣告について一覽あるべし。 九月十日

### 東 邦 協 會 會 報

●日露海戦記(佐世保海軍勳功表彰會出版) 本書は佐世保市の志有が共同一致して今回の大戦役に於ける我海軍の偉勳を長へに表彰せんが爲め先づ敢て軍港の附近に求め茲に堅牢なる一個の公會堂を建設し猶又其附帯の事業として完全無比の海戦史を出版せんが爲め慘憺なる經營の餘りに成れるもの是れ即ち茲に紹介せんとするの好著なり紙數約八百頁附録として會戰の海面を一目瞭然たらしむる大海圖を以てし戰記と對照して多大の便宜を得せしむる如くす依て之を一觀すれば猶現に明確なるを疑はざる吾人の記憶も又爲めに刷新せられ我海軍先づ勢力對等の一大艦隊を痛撃して之を旅順に滅亡せしめ更に新規の大艦隊を遠く波羅的より誘致して一舉に日本海に築りし偉勳は素より此間に起伏せし戦略上の幾多の波瀾を描寫

と讀者をして能く「トラファルガー」の海戦が歐洲の形勢を一變し日本海に戦場が東亞の面目を一新せしが如く海軍の効用が如何に重要なかを知らしむるに於て益する所擧げて言ふべからざるものあり殊に價格頗る低廉にして裝釘又宜しきを待たれば男女を問はず我海軍の將來に相當の注意を拂ふものは云ふまでもなく有る子弟の爲めに一本を藏せんとせば好機を逸せず本誌巻頭の廣告に依り預約せられて可なりと信す 九月二十日

### 日々新聞

日露海戦記献上 佐世保市有志の組織せる海軍勳功表彰會の事業として編著したる日露海戦記附録海戦々城大海圖は去る十五日式部主事稻葉千爵の傳獻により 兩陛下の乙夜の覽に供したる由 十一月二十三日

### 報知新聞

●海戦記乙夜の覽に入る 日露海戦の策源地たりし佐世保市海軍勳功表彰會の編著せる日露海戦記及び附録海戦々城大海圖は數日前稻葉千爵より 天皇 皇后兩陛下に献上し乙夜の覽に供したり同書は表彰會が空前の大海戦を永世に紀念せんため心血を傾瀉して諸般の調査を爲し且つ海軍部内の有力なる將官並に少壯士官の指導援助によりて成り未だ世に知られざる戦争當時の行動及び事業さへ網羅して遺憾なく海戦に關する唯一の良書なりとぞ 十一月廿三日

### 東京朝日新聞

日露海戦記 佐世保市有志の組織せる海軍勳功表彰會の事業として

二

●海戦記乙夜の覽に入る 佐世保市有志の組織せる海軍勳功表彰會の事業として編著したる日露海戦記并に海戦城大海圖は去る十五日式部主事稻葉千爵より 兩陛下に傳獻し乙夜の覽に供したる由同書は同會當事者の心血を凝して事實を調査し且つ海軍部内に於ける有力なる將官并に少壯士官の指導と援助によりて成れるものなり 十一月廿三日

### 人民新聞

日露海戦記乙夜の覽に入る 佐世保市有志の組織せる海軍勳功表彰會の事業として編著したる日露海戦記附録海戦々城大海圖は去る十五日式部主事稻葉千爵より 兩陛下に傳獻し乙夜の覽に供したる由なるが同書は同會當事者の心血を凝して事實を調査し且つ海軍部内に於ける有力なる將官並に少壯士官の指導と援助によりて成れるものなれば記事精確にして往々軍機の機密に涉りし箇所もあるやにて此種の著述に免れ難き粗澁のものにあらず本書の發賣せらるや海軍當局者に於て其軍機洩洩の慮を以て此事情を洩したる將士を調査し且つ本書の版權を買取せんとし大恐慌を來したるありしが已に豫約書八千部を發達せし後なりしを以て遂に此議止み發賣を許すに至りたることあり此事實はても本書の眞價を知るに足るべし 十一月廿三日

### 國民新聞

日露海戦記 佐世保市有志の組織せる海軍勳功表彰會の事業として

編著したる日露海戦記附録海戦々城大海圖は去る十五日式部主事稻葉千爵より 兩陛下に傳獻し乙夜の覽に供し奉りたる由 十一月二十三日

### 二六新聞

日露海戦記 佐世保市の海軍勳功表彰會編著日露海戦記は去る十五日式部主事稻葉千爵より 兩陛下へ傳獻して乙夜の覽に供したる由 十一月廿三日

### 時事新報

日露海戦記 佐世保海軍勳功表彰會著第六一四一八十八布神田西紅梅町同會支部二回大海圖三十錢三十七年二月日露國交の破裂より兩國海戦の顛末に至るまで正確に詳記し兩國交回復を後記とす旅順開城會議の情況をも附記したるものなり 天覽の光榮を得たり尙ほ大海圖を別冊として添ふ本書の或る部分は聊か當該部に思む所なりと云ふ 十一月二十五日

### 萬朝報

●佐世保市民の組織したる海軍勳功表彰會で編纂し出版した日露海戦記は此頃乙夜の覽を辱けなくしたるが今まで出版された海戦史中最も視るに足るは此書であらう、殊に附録の海圖は尤も價値あるものなり 十一月廿五日

### 中央新聞

●日露海戦記(全一冊) 在佐世保海軍勳功表彰會の編纂にして是れ迄發行せられたる日露海戦史中特に異彩あるもの本文は第六一四四頁にして別に海戦日誌と國交の回復とを添へたり卷頭には 大元帥陛下の御肖像を初め歴戦の海軍將校數十名の寫眞版併びに東郷大將以下の題字を挿入したり先づ國交の破裂より筆を起し戰時決定時代、戰時決定時代、戰果收得時代、の三編に分ち日露海戦上の出來事は最大洩らさず詳細に記述せり挿入せる海戦圖は何れも實戦に參加したる各將校の意見を叩きて製圖したれば信頼するに足る又別は精細なる海戦々城大海圖を附録としたるは用意周到と云ふべし紙質製本中分なし佐世保市濱田町六五(佐世保海軍勳功表彰會發行金二圓大海圖金三十錢) 十一月廿五日

### 日本

●日露海戦記天覽 佐世保軍港に設けられたる海軍勳功表彰會にて編纂中なりし日露海戦記は此程出來したるを以て宮内省へ獻納せしに畏くも乙夜の覽に供せらるゝこととなりたりと云ふ 十一月廿九日

### 報知新聞

●日露海戦記 日露海戦の策源地たりし佐世保の海軍勳功表彰會が同地公園に一大紀念館を設立するの計畫を建てんとを期し之を刊行せしなり斯書彪然たる七百頁の大冊にして前編本紀後紀に分ち前紀は日露國交の破裂の真相を詳記し本紀は第一期戰時決定時代、第二期戰時決定時代、第三期戰果收得時代の三編に分ち日露海戦力の比

三

襲、聯合艦隊の出動仁川港外の海軍旅順口初度の攻撃交戦後の兩國  
々情及浦鹽艦隊、第二次旅順攻撃、第一回旅順口閉塞、第三次旅順  
攻撃及び海洋島占領、浦鹽の砲撃、第四次旅順攻撃等より敵回の旅  
順閉塞、浦鹽艦隊の暴動、陸兵掩護の行動其他南道艦隊、露國東洋  
艦隊、日本海の大津戦等大小の戦闘巨細の事象は無論休戦條約、三  
笠の燔沈、聯合艦隊の凱旋に至るまで記述して海軍の行動更らに餘  
蘊無く後述は日露國交の回復を記し尙ほ各海戦全圖及び參加將校  
の肖像を掲げ東郷、鯨島、上村各將軍の題辭を飾り別に天下の絶品  
と稱せらるゝ日露海戦々城明細大海圖を附録とせるが日露海戦に關  
する好個無類の好紀念と謂つべし(正價二圓) 十一月廿九日

### 電報新聞

●日露海戦記(海軍勳功表彰會編纂) 斯の大冊子は佐世保が其關係  
する所重大なる者なりとして日露戦役中に於ける我が海軍の勳功を  
表彰せんが爲めに編纂せる者文章整飾叙事的確加ふるに採非宜しき  
に叶ひ前記本記後記の二篇に涉りて遺憾なく此無前の大役を描破し  
別に海戦日誌戦闘地圖、旅順閉城會議狀況を付せり以て海戦史中の  
白眉たりとすべし(定價金二圓發行所神田區西紅梅町佐世保海軍勳  
功表彰會) 十一月廿九日

## 海軍勳功表彰會設立主旨

日露國交の斷絶するや、百萬の貔貅海に陸に勇戦奮闘し、敵亦相拮抗  
して能く戦ひ、連戦二ケ年に亘りたるも、幸にして我忠勇なる海陸軍  
人諸士の克忠健闘により、終に城を開き降を請ひ、乃ち陸軍は奉天を  
以て了り、海軍は日本海を以て局を結べり、茲に絶大の偉勳を奏し、而  
して百年大計の基礎を固め、東洋平和の保障を得たるは、元是れ祖宗  
神明の靈護と、大元帥陛下の御稜威とに歸すと雖、抑又我軍人諸士が、  
義勇奉公の丹誠を抽んで、献身殉國以て有終の美を全ふせしに賴ら  
ずんばならず、吾人國民たるもの、起て滿腔の赤誠を披瀝し、共に俱に  
感謝の意を表せずして可ならんや、就中我佐世保市の如き、這回の戦  
役前後を通じ、我海軍の策源地として、最も密接の關係を具有せしと  
共に、復將來に於ても、尙一層の聯絡を保持せざるべからず、是れ吾人

が海軍勳功表彰會を設立する所以にして、將に其事業としては、佐世保公園に一大紀念館を設立せんことを期し、茲に『日露海戰記』を刊行して、其の勳功を表彰し、以て之を永遠に傳へ、而して其の天佑と德澤とを頌揚せんとす、冀くば江湖の志士、相依り相助け、尙速に本會の事業を全ふせしめんことを、飲んで之を聲明す。

明治三十九年七月上澣

佐世保海軍勳功表彰會 (發起者氏名)

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 田 中 國 吉   | 谷 口 彌 吉   |
| 田 熊 萬 藏   | 長 醫 秀 夫   |
| 長 井 龜 助   | 熊 澤 武 二   |
| 山 口 莞     | 松 尾 良 吉   |
| 福 島 末 一   | 小 嶺 貫 一 郎 |
| 森 永 泰 兵 衛 | 森 田 福 次 郎 |
| 佐 藤 敬 太 郎 |           |

明治三十九年六月廿三日發行  
 明治三十九年八月廿三日發行  
 明治三十九年九月廿三日發行  
 明治三十九年十月廿三日發行

正價金貳圓  
 附錄大海圖金參拾錢

著 者

長崎縣佐世保市濱田町六十五番地  
 佐世保海軍勳功表彰會

發 行 者

長崎縣佐世保市濱田町六十五番地  
 田 熊 萬 藏

印 刷 者

東京市神田區仲猿樂町四番地  
 藤 澤 外 吉

發 行 所

長崎縣佐世保市濱田町六十五番地  
 佐世保海軍勳功表彰會

發 行 所

東京市神田區西紅梅町十一番地  
 佐世保海軍勳功表彰會支部

印 刷 所

東京市神田區仲猿樂町四番地  
 秀 光 社



古書籍売買  
博文堂書店  
都立大学・八雲通り  
TEL (723) 2783

国立国会図書館

〒100 東京都千代田区永田町一丁目10

電話 (581) 2331・2341

日露海戰記附錄

天下絕品

日露海戰  
戰域明細

大海圖

佐世保

海軍勳功表彰會發行

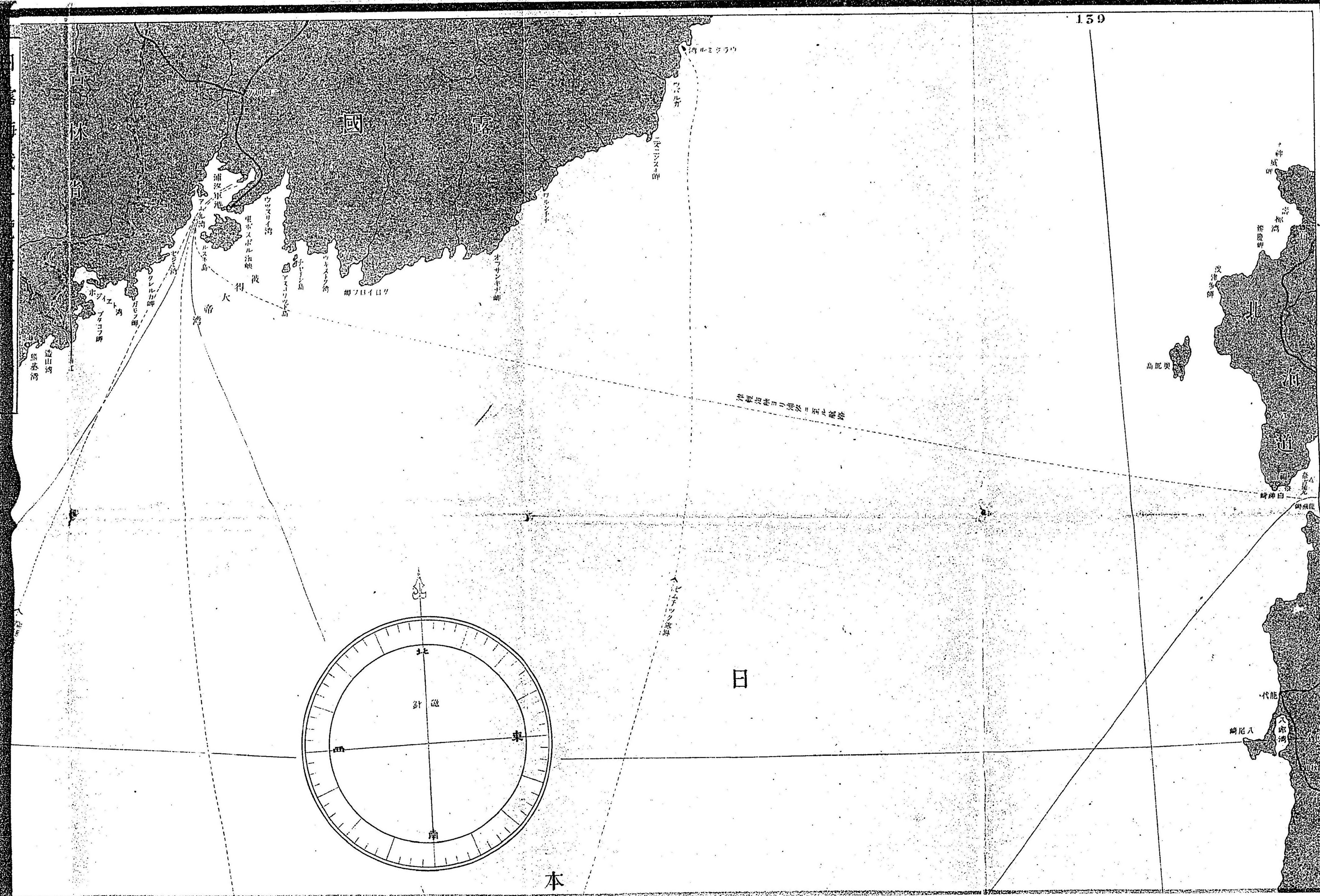
53A55848

68001  
99

# 日露海戰記附錄

明治四十年六月廿五日四版印刷  
明治四十年六月三十日四版發行

(正價金)

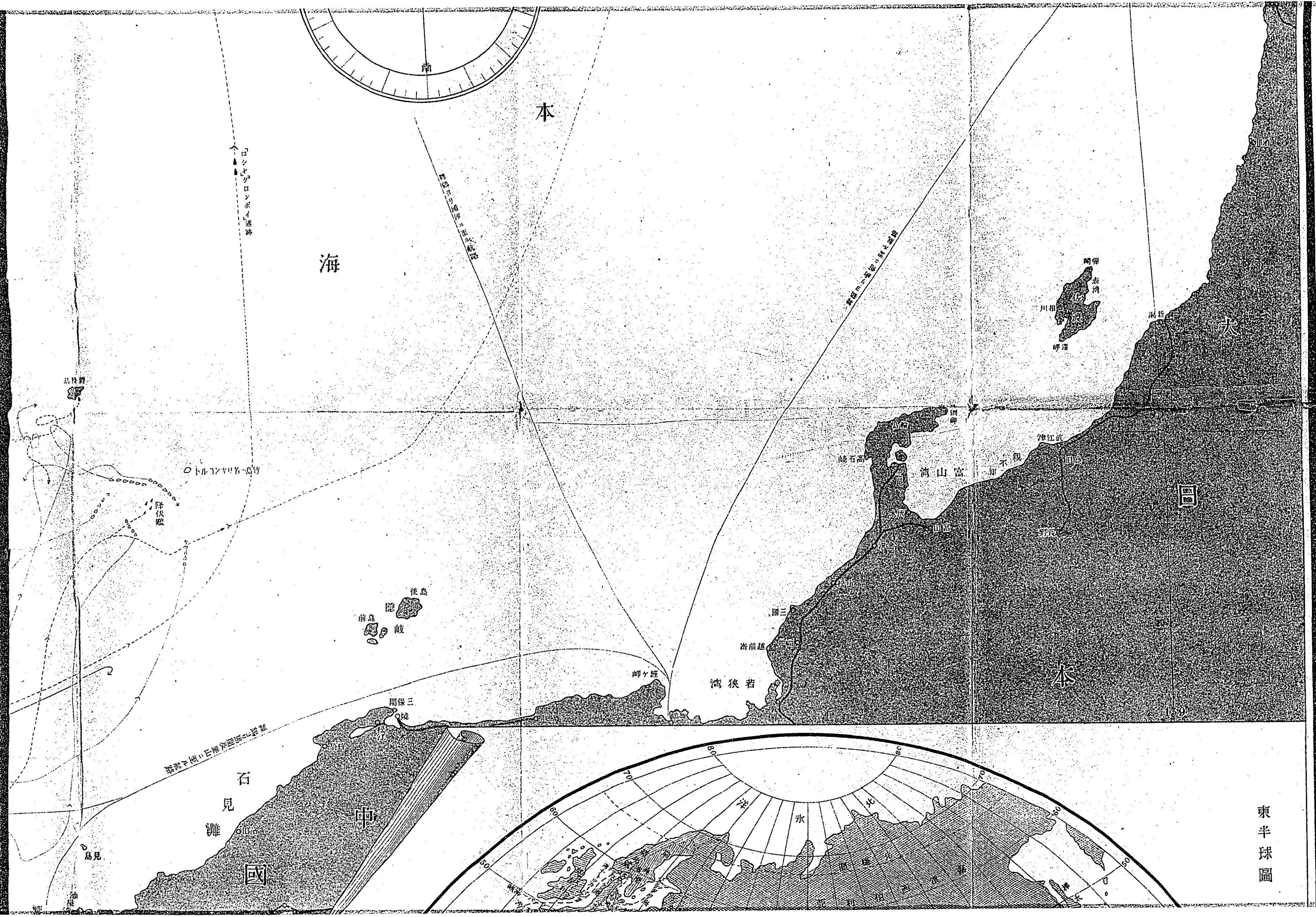




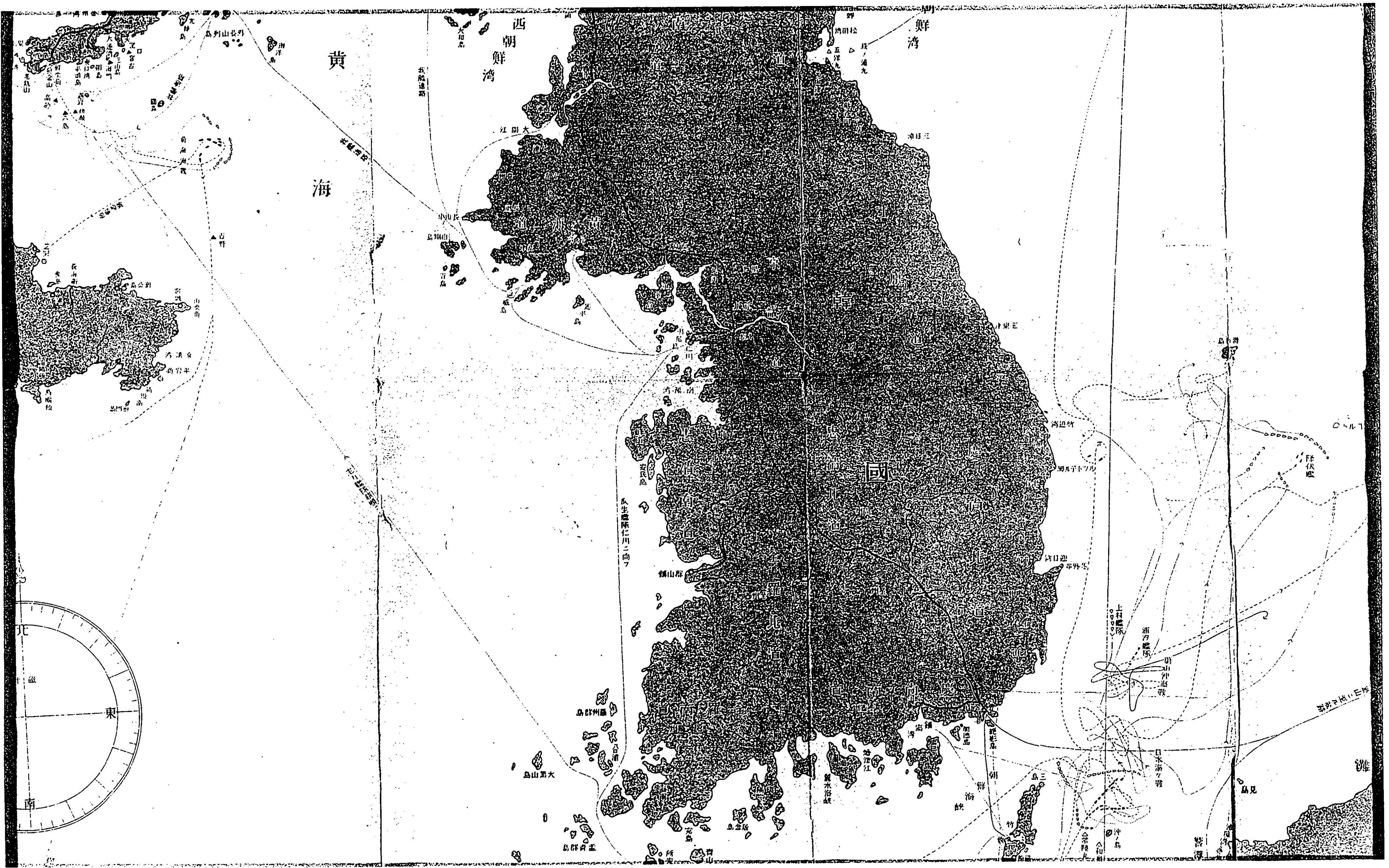




(正價金三十錢)





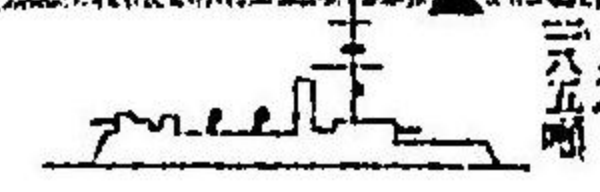
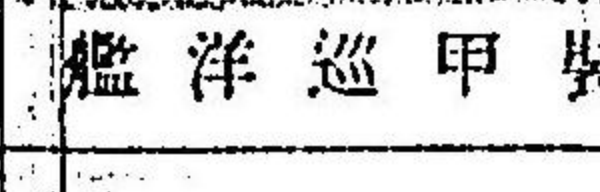



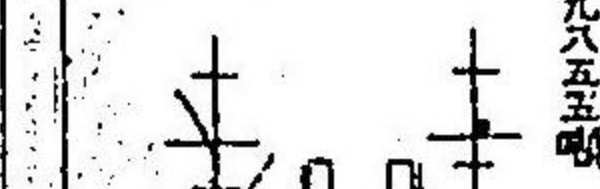


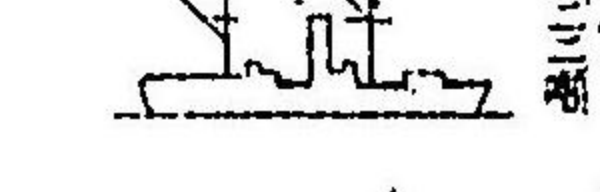
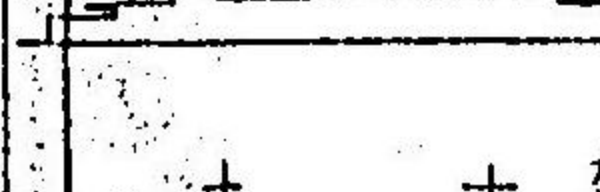
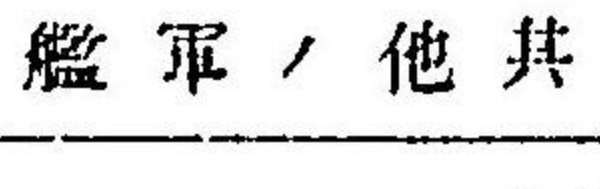

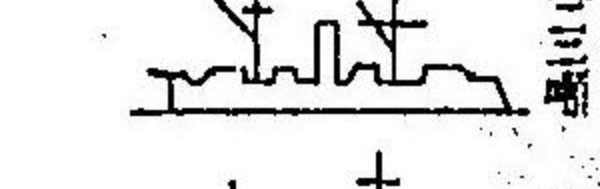



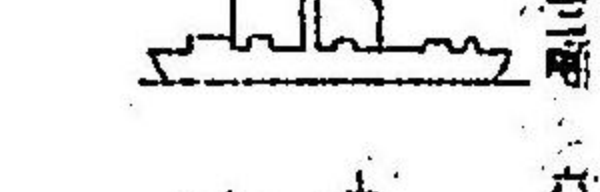



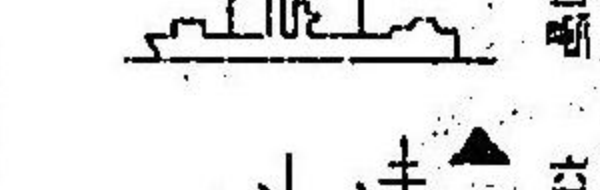
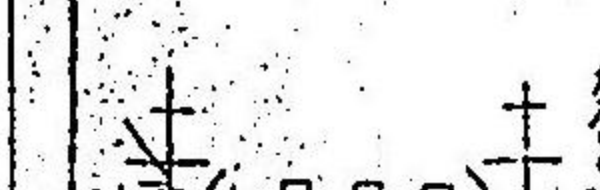


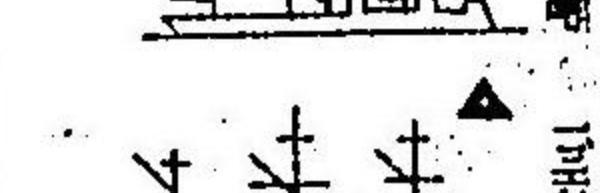
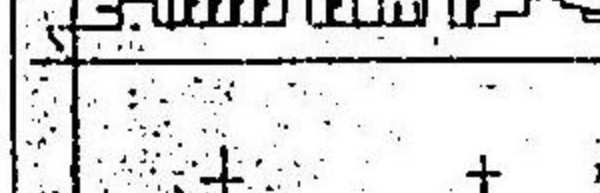

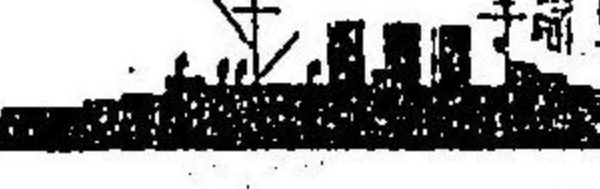
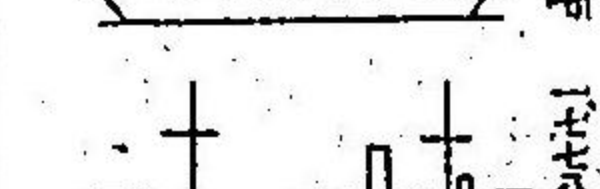



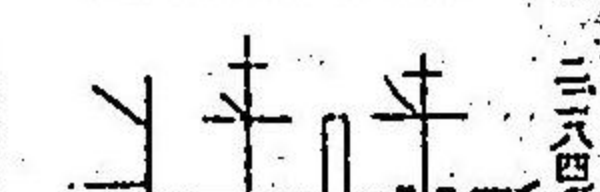



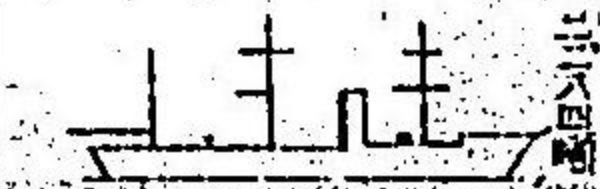

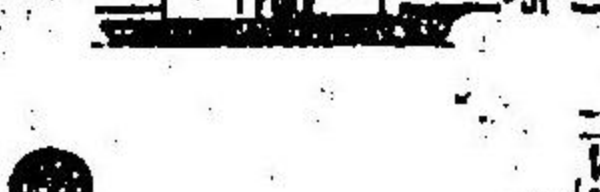
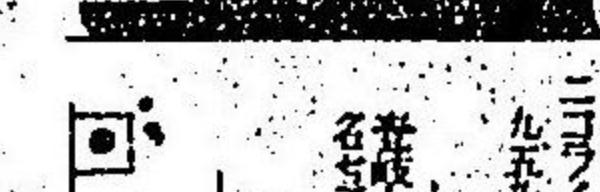
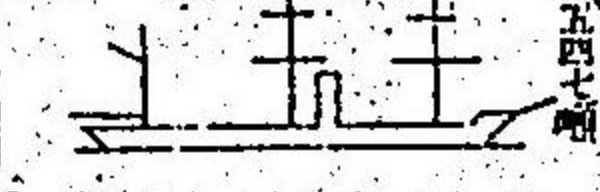



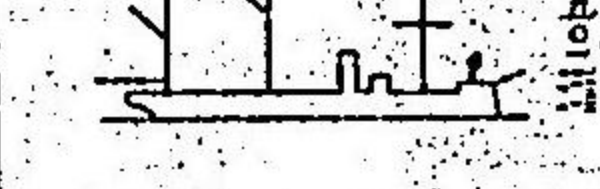


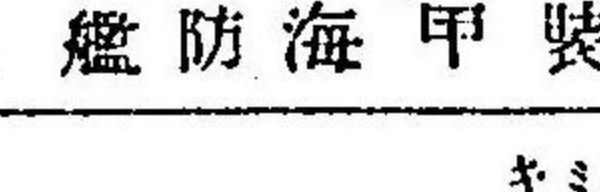
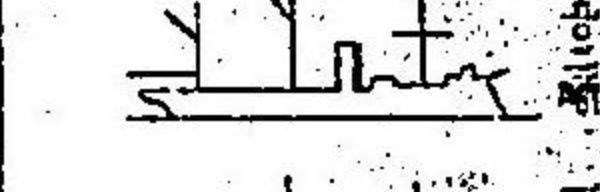
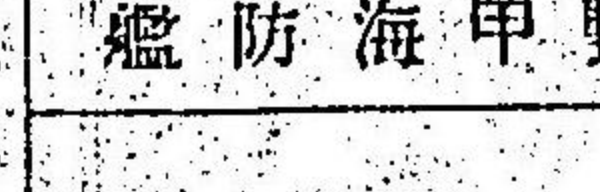


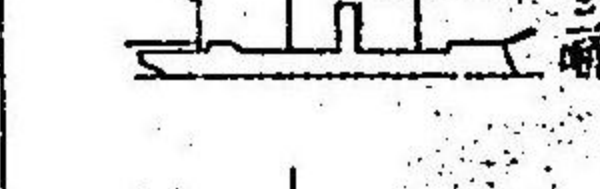



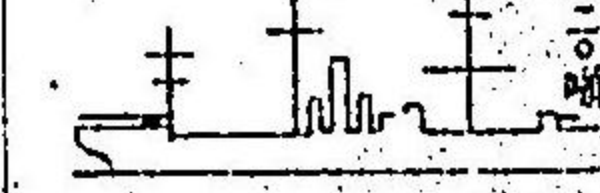


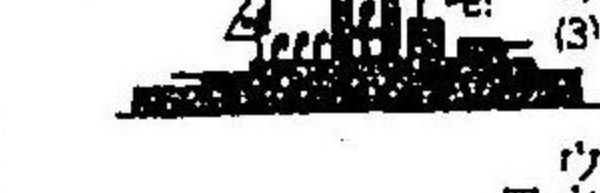
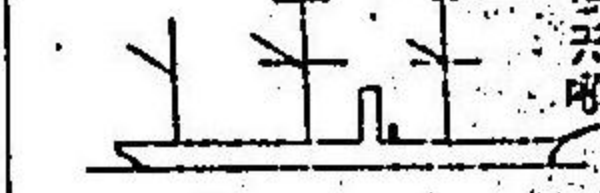
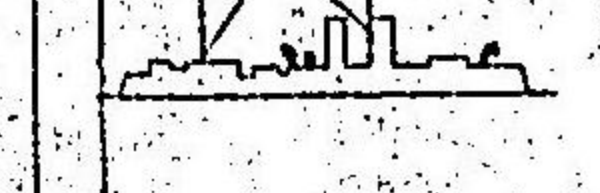


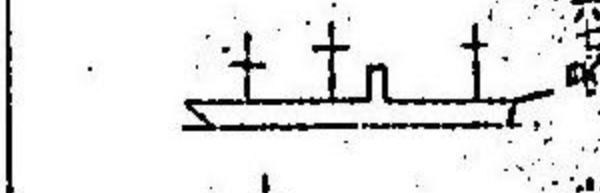



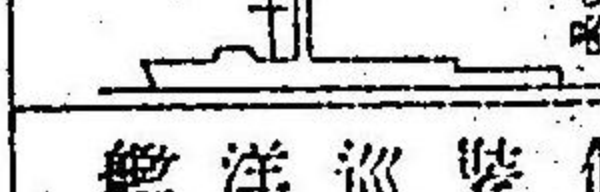
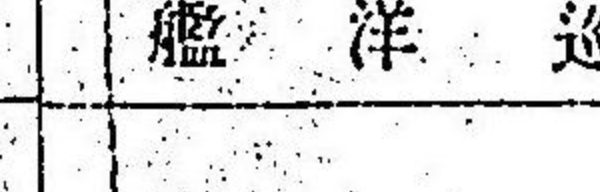

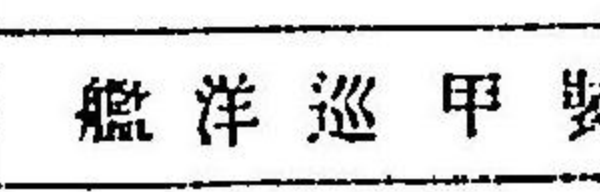


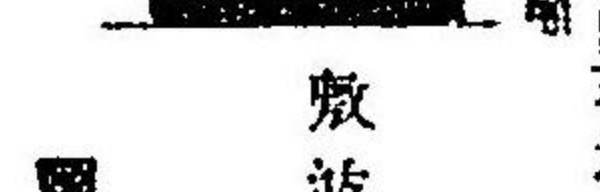





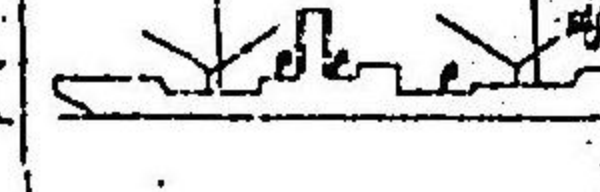
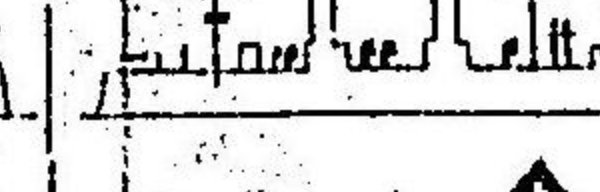
東半球圖

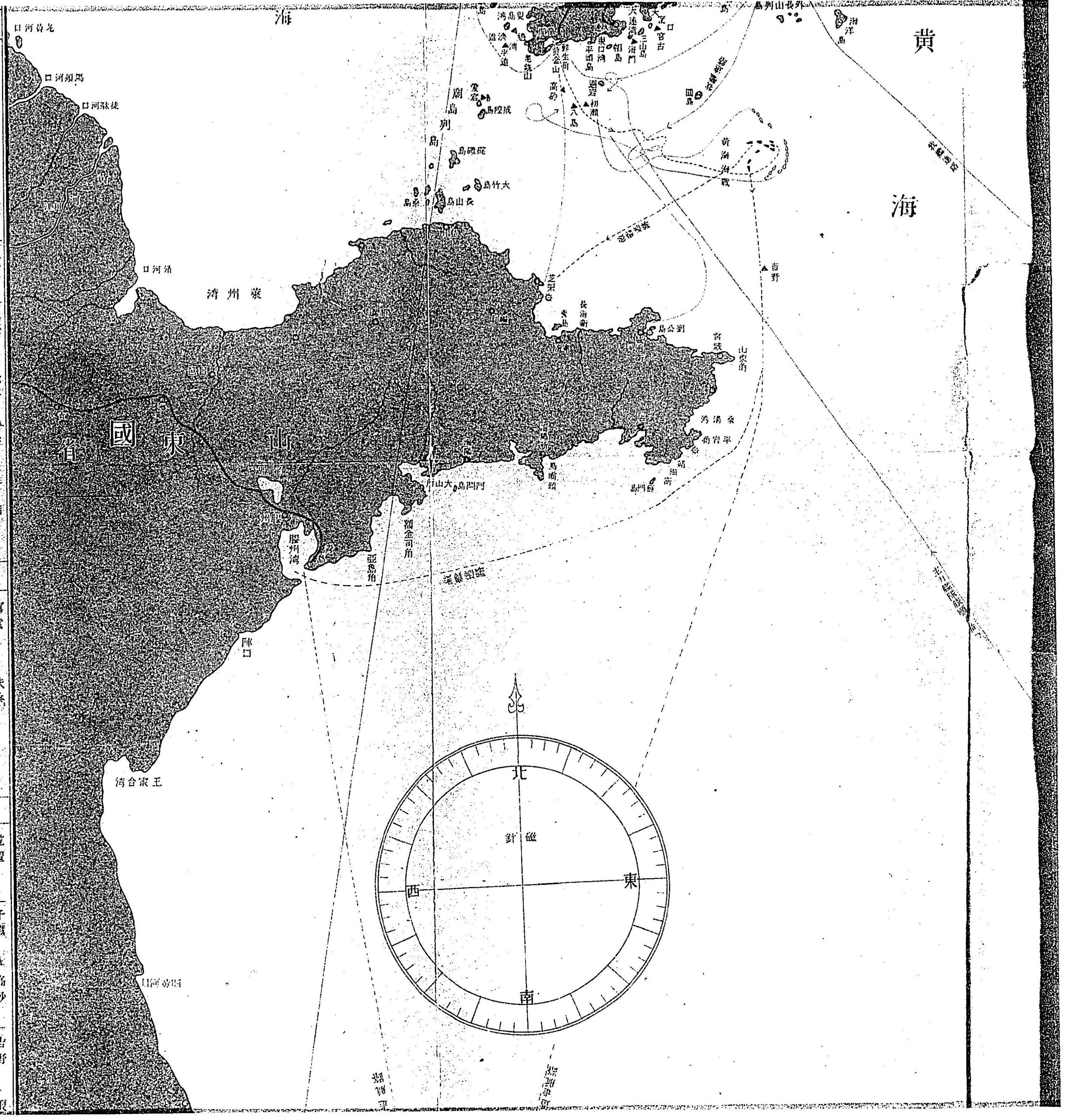


不許複製

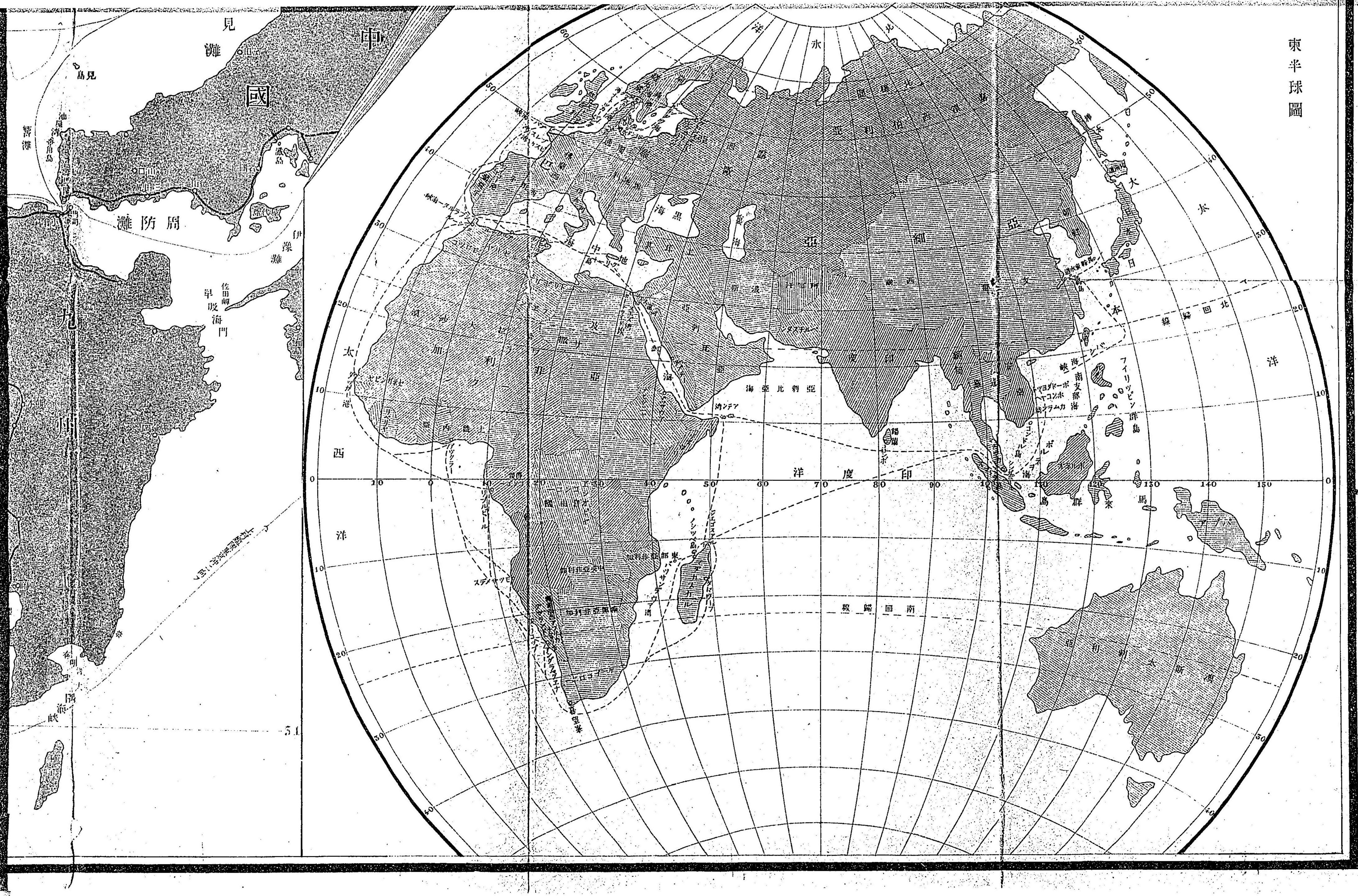
發行所

佐世保軍港  
佐世保海軍

 アルビオン 三三六五噸	 クローネン 二二五〇噸	 中遠 三三〇〇噸	 艦洋巡甲裝 淺間 九〇〇〇噸
 艦軍ノ他共	 イノセント 二二五〇噸	 筑紫 三三〇〇噸	 常盤 九〇〇〇噸
 グレン 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 摩耶 三三〇〇噸	 吾妻 九〇〇〇噸
 オウゴン 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 赤城 三三〇〇噸	 八咫 九〇〇〇噸
 ラッセル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 海門 三三〇〇噸	 出雲 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 高雄 三三〇〇噸	 磐手 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 金剛 三三〇〇噸	 春日 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 比叡 三三〇〇噸	 日海 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 天龍 三三〇〇噸	 武蔵 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 大和 三三〇〇噸	 艦防海甲裝
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 葛城 三三〇〇噸	 御遠 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 豊前 三三〇〇噸	 扶桑 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 天城 三三〇〇噸	 艦洋巡
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 勢城 三三〇〇噸	 笠置 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 宇治 三三〇〇噸	 千歳 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 艦洋巡裝假	 高砂 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 佐渡丸 三三〇〇噸	 吉野 九〇〇〇噸
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 備後丸 三三〇〇噸	 浪
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 信濃丸 三三〇〇噸	 阿
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 香港丸 三三〇〇噸	 日
 アムステル 二二五〇噸	 アムステル 二二五〇噸	 阿	 日



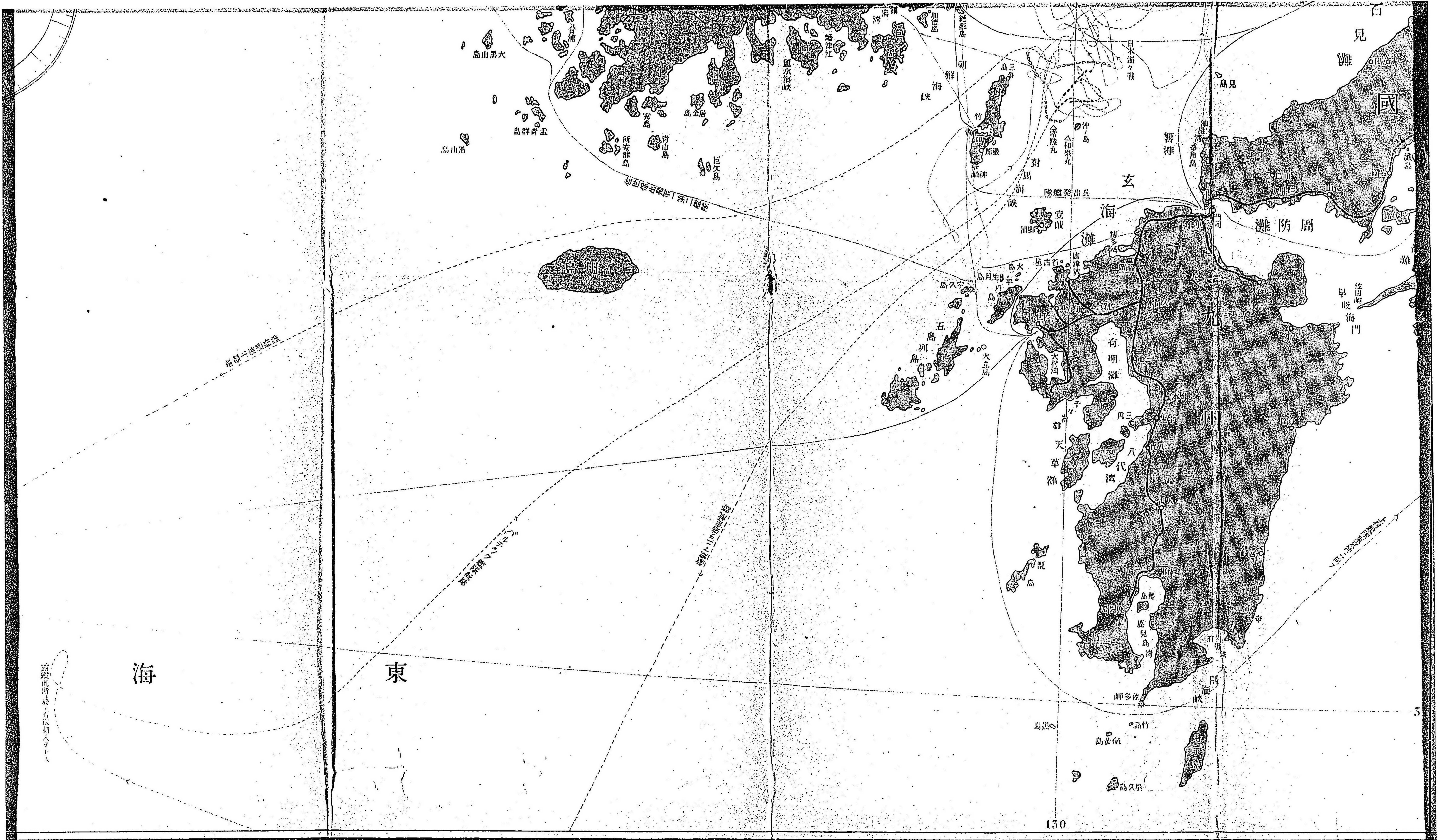
東半球圖



佐田海門

西

5.1



白  
見

國

島見

玄

灘防周

早  
吸  
海  
門

九

有  
明  
灘

天  
草  
灘

八  
代  
灣

島  
鹿  
兒  
島  
灣

柳  
多  
佐

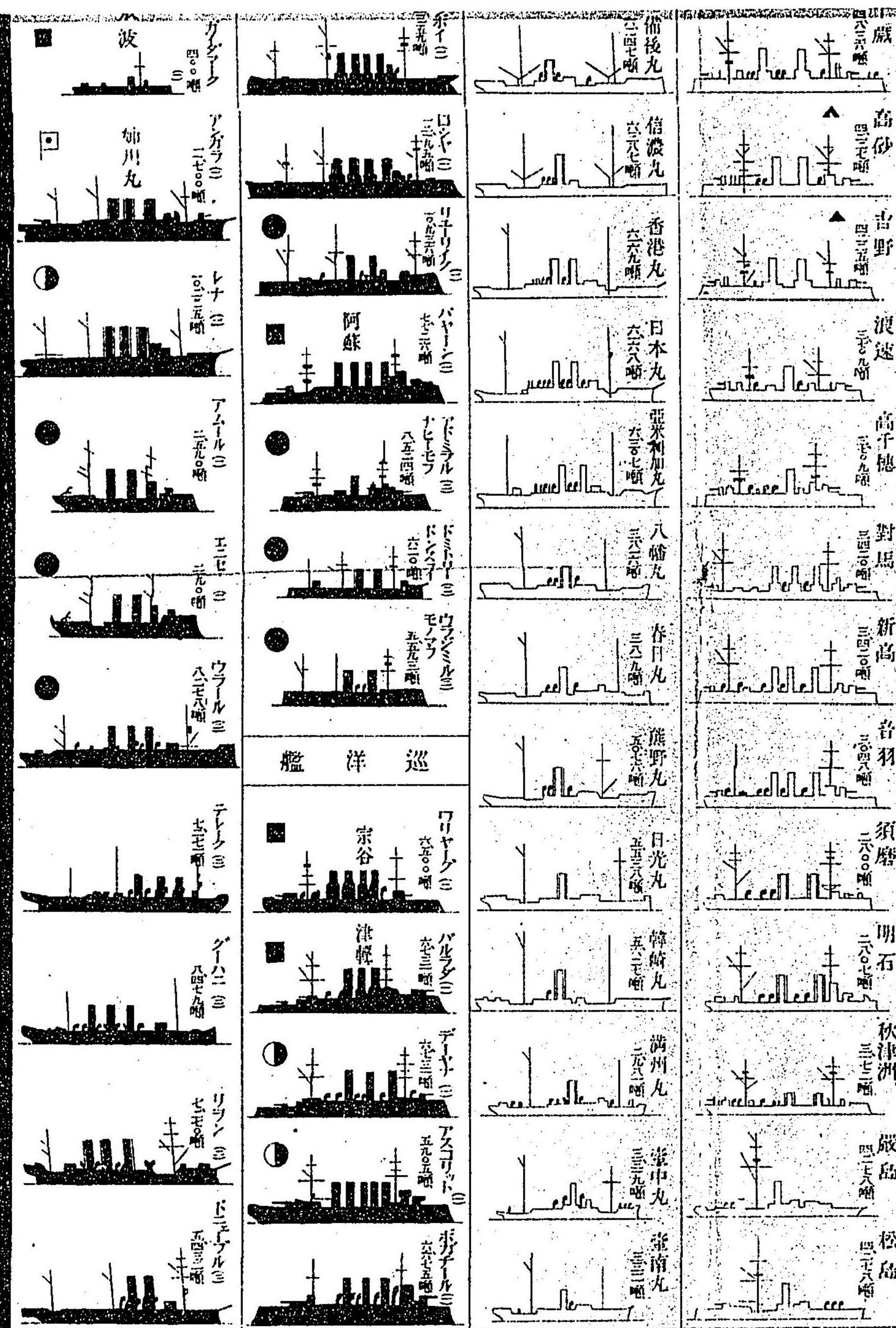
海

東

海  
此  
所  
於  
在  
以  
稱  
入  
了  
々

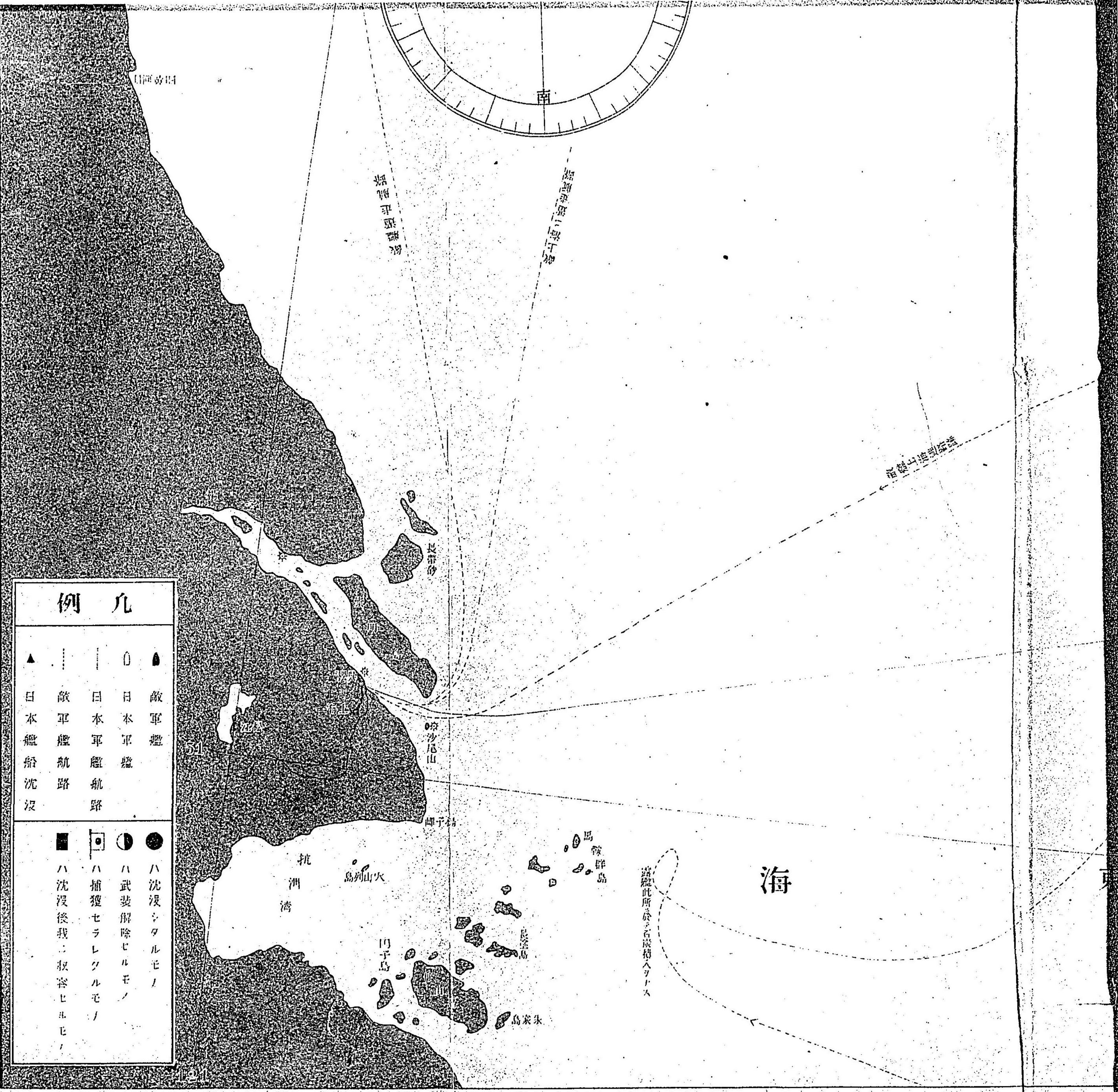
世保軍港  
佐世保海軍勲功表彰會本部

東京神田區西紅梅町十一番地  
佐世保海軍勲功表彰會支部



巡洋艦

上表ノ外日本ハ驅逐艦  
二十二隻水雷艇八十五  
隻ヲ有セリ  
上表ノ内戰尹ニ參加シ  
タル者ハ驅逐艦ヲ合シ  
テ九十二隻  
以上總噸數四十一万〇  
二百二十四噸  
内喪失セシ者八十三隻  
此噸數二十八万九千七  
百七十八噸





# 各新聞の評論

時事新報 (四十年一月二十七日)

## 日露海戦記

(海軍勳功表彰會編發、菊版七百餘頁、布表紙附録大海圖定價二圓三十錢)  
 上梓、先づ乙夜の覽に供するの光榮を得たる日露海戦記は、由來海軍に深縁ある佐世保有志の編纂に係るものにして、編者の告白する處に依れば、材料の多くは當該將校の指導と、少壯士官の援助とに由り蒐集したる結果、編成りて往々軍機に渉るものを發見し、爲めに改訂せし箇所少なからざりしと云ふ。試みに其内容の一斑を紹介せんに、巻頭に收めたる黃海、蔚山、日本海の三海戦圖と、秩序正しき海戦日記とは、如何にも専門家の手に成りしもの、如し。其本文に入りては前記、本記、後記に大別し、前記には日露國交の破裂せし所以を略叙し、本記は戰勢決定時代、戰果收得時代の三篇に分ち、即ち第一篇は聯合艦隊の出動より旅順開城に至るまで、第二篇は浦沙北韓の偵察より日本海の大海戦に至るまで、第三篇は北道艦隊の進發より聯合艦隊の解散に至りて筆を擱き、毎戦必ず簡明なる戦圖を挿入して、刻々戦狀の變遷を示したる其上に、開戦の先立ち東郷長官に賜はりたる勅諭、艦隊編制の變化、八嶋沈没の慘況、出羽中將の南航等、世間未だ尋く知られざる事實を明にせるあり、後記に至つては、日露國交の回復を叙し、旅順開城會議の狀況を録して全篇の完結を告げ其附録として添へし大海圖も意匠精新、又以て珍とするに足るものあり。思ふに、日露今回の大海戦は、近世海軍の大試験にして戦術に、技術に、新紀元を劃したることなれば、未嘗有の大字より成る戦史の先づ我帝國に編纂さるべき筈なるに、從來刊行のもの、多くは新聞雜誌の切抜補綴に過ぎず。此書亦不滅の光彩を後昆に傳ふるの、價値あるや否や、俄かに列し雖し雖も之を有り觸れたる戦記に比すれば、記事の着實にして精細なる、文の暢達にして姿麗ある、確かに一頭地を抜くものと云ふべく、評者は世の讀書家に向かつて暫らく此書を推奨せんと欲するものなり。

報知新聞 (十一月廿三日)

●海戦記乙夜の覽に入る 日露海戦の発源地たりし佐世保市海軍勳功表彰會の編纂せる日露海戦記及び附録海戦々域大海圖は去る十五日式部主事稻葉子爵より天皇 皇后兩陛下に献上し乙夜の覽に供したり同書は表彰會が空前の大海戦を永世に紀念せんため心血を傾渇して諸般の調査を爲し且つ海軍部内の有力なる將官並に少壯士官の指導援助によりて成り未だ世に知られざる戰爭當時の行動及び事業さへ網羅して遺憾なく海戦に関する唯一の良書なり

人民新聞 (十一月廿三日)

●日露海戦記乙夜の覽に入る 佐世保市有志の組織せる海軍勳功表彰會の事業として編纂したる日露海戦記附録海戦々域大海圖は去る十五日式部主事稻葉子爵より 兩陛下に傳獻し乙夜の覽に供したる由なるが、同書は同會當事者の心血を盡き海戦に於ける事業を調査し且つ海軍部内に於ける有力なる將官並少壯士官の指導と援助によりて成れる者なれば記事精確にして往々軍機の秘密に渉たる箇所もあるやにて此種の著述に免れ難き類編のものにあらず本書の發賣せらるゝや海軍當局者に於て其軍機漏洩の虞を以て此事情を洩したる將士を調査し且つ本書の版權を買取せんとし大恐慌を來したるとありしが、已に豫約にて八千部を發賣せし後なりしを以て遂に此阻止を發賣を許すに至りたり此事實にても本書の眞價を知るに足るべし

二六新聞 (十二月二十日)

●日露海戦記(佐世保海軍勳功表彰會) 本書は戦役中海軍の大策源地なりし佐世保の市民が海軍の偉勳を永遠に傳へんが爲め勳功表彰會を設立したる第一着の事業として策して第二事業として公圖に一大記念館を設立するの實を助けんが爲め刊行したるものなり一覽するに七百餘頁の冊子にして前記、本記、後記の三段に分ち叙せしが中に止るる海戦の本紀に於ては材料豊富詳密も詳密にして黃海、蔚山、日本海の三大海戦を始め戦役中に於ける海軍行動の一切を網羅し最も懇切に叙述せり殊に幾多挿入せる圖解及び本書の附録とせる「海戦々域明細大海圖」の如きは實戦に參加したる將校の意見を叩きたりと云ひ一見其價値を認むべきものなり而して全體に亘り精確を保する點に於ては民間の力能く其充分を極むる能はざるも出來得る限り之を期せんと欲したるもの、如く先づ以て今日迄刊行されし海戦記中の最たるものなり

萬朝報 (十一月廿五日)

●佐世保市民の組織した海軍勳功表彰會で編纂し出版したる日露海戦記は此頃乙夜の覽を辱けなくしたるや、今まで出版された海戦史中最も視るに足るは此の書であらう、殊に附録の海圖は尤も價値あるものだ

大阪朝日新聞 (十二月十三日)

●日露海戦記 海軍勳功表彰會編 本書は歴史ありて以來未曾有の大事業たる日露海戦の顛末を詳細に記述し傳へて以て天下後世に誇るべきものなり佐世保市の事業として記念すべき海軍勳功表彰會よりの刊行に係る製本美麗表紙の意匠は横山大觀丸山晚復二氏の考案にて記念スタンプの金文字捺然たり別に附録として日露海戦々域明細大海圖を添ふ

國民新聞 (十二月廿五日)

●日露海戦記(全一冊) 在佐世保海軍勳功表彰會の編纂にして是れ迄發行せられたる日露海戦史中特異なるもの本文は菊版七十四頁にして別に海戦日記と國交の回復とを添へり頭巻には、大元帥陛下の御肖像を始め歴戦の海軍將校數十名の寫眞版及び東郷大將以下の題字を挿入したり先づ國交の破裂より筆を起し戰勢決定時代、戰果收得時代、戰果收得時代の三編に分ち日露海戦上の出來事は最大洩らさず詳細に記述せり挿入せる海戦圖は何れも實戦に參加したる各將校の意見を叩きて製圖したれば信頼するに足る、又別に精細なる海戦々域大海圖を附録としたるは用意周到と云ふべし紙質製本中分なし佐世保市濱田町五六(佐世保海軍勳功表彰會發行金二圓大海圖三十錢)

中央新聞 (十一月廿五日)

●日露海戦記 佐世保海軍勳功表彰會に於て發刊せる日露海戦記は全部を前記本記後記の三編に分ち前記には日露國交破裂の事實を簡述して開戦の由來を知らしめ本記に於ては戰勢決定時代の日露兩國海軍力の比較より説起して聯合艦隊の出動に及び仁川港外の海戦より始めて筆を大海戦の智謀に染め最も精細且つ最も快活に叙述したれば當に文字の飛躍して龍神舞ひ海若時ふの大活劇を目前に瞻るの思あるのみならず海戦上の智識を得るに於ても亦餘師あるを覺ゆ蓋し著者海軍に老練せるに加へて實戦參加將校の助力せるに非ずんば寧ろ能く斯の如きを得んや後編に至りて局面一變風収まり波靜まりて日露國交の回復を叙し最後に附録として旅順開城會議狀況を収め以て全篇を完結せり殊に篇中挿むところの大海圖及開戦圖の如き眞に天下の逸品といふも溢辭にあらざるなり又巻首に掲ぐる所の貴顯の御肖像を始め海軍將校將官の肖像海上實戦の眞景開塞船沈没状態等の口繪及東郷島南大村上村放本兩中將の題字等皆見るべく彼我大海戦の紀念として一本を購ひ永く之を家珍として傳ふるも亦可ならずや(神田區駿河西紅梅町一海軍勳功表彰會支部發賣)

東京日々新聞 (二月十三日)

●日露海戦記 佐世保海軍勳功表彰會に於て發刊せる日露海戦記は全部を前記本記後記の三編に分ち前記には日露國交破裂の事實を簡述して開戦の由來を知らしめ本記に於ては戰勢決定時代の日露兩國海軍力の比較より説起して聯合艦隊の出動に及び仁川港外の海戦より始めて筆を大海戦の智謀に染め最も精細且つ最も快活に叙述したれば當に文字の飛躍して龍神舞ひ海若時ふの大活劇を目前に瞻るの思あるのみならず海戦上の智識を得るに於ても亦餘師あるを覺ゆ蓋し著者海軍に老練せるに加へて實戦參加將校の助力せるに非ずんば寧ろ能く斯の如きを得んや後編に至りて局面一變風収まり波靜まりて日露國交の回復を叙し最後に附録として旅順開城會議狀況を収め以て全篇を完結せり殊に篇中挿むところの大海圖及開戦圖の如き眞に天下の逸品といふも溢辭にあらざるなり又巻首に掲ぐる所の貴顯の御肖像を始め海軍將校將官の肖像海上實戦の眞景開塞船沈没状態等の口繪及東郷島南大村上村放本兩中將の題字等皆見るべく彼我大海戦の紀念として一本を購ひ永く之を家珍として傳ふるも亦可ならずや(神田區駿河西紅梅町一海軍勳功表彰會支部發賣)

東京朝日新聞 (十一月二十三日評論)

東京日本新聞 (十一月二十九日評論)

東京電報新聞 (十一月二十九日評論)

大阪毎日新聞 (十一月二十九日評論)

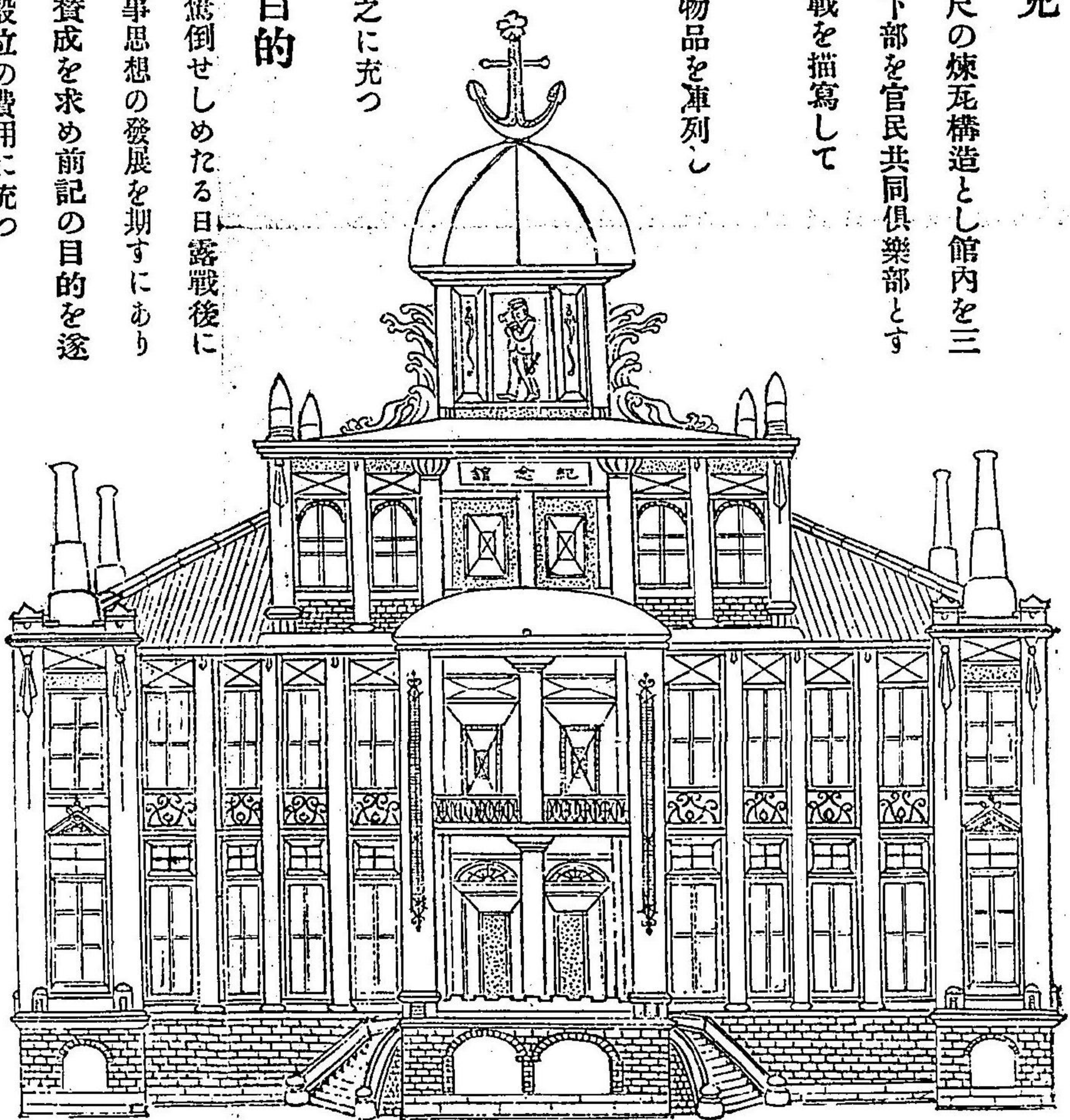
●尙此外全國各新聞及雜誌等に評論あれど大同小異にして餘白なきを以て略す

## ◎海軍勳功表彰會主意書

◎日露國交の斷絶するや百萬の貔貅海に陸に勇戰奮闘し敵亦相拮抗して能く戦ひ連戦二ケ年に亘りたるも幸にして忠勇なる我陸海軍の善謀健闘により絶大の偉勳を奏し茲に東洋平和の基礎を確立するに至れり即ち是れ祖宗神明の靈護と 大元帥陛下の御稜威とに歸すと雖も抑又我軍人諸士が義勇報公の丹誠に由らすんばあらず吾人國民たるもの起て滿腔の赤誠を披瀝し共に俱に感謝の意を表せずして可ならむや是れ吾人が「海軍勳功表彰會」を設立する所以にして其事業としては日露海戦記を公刊して海軍の偉勳を長に表彰し併て海軍の策源地たりし佐世保軍港に一大紀念館を設立して千古の紀念とし今後益々海軍思想の發展を斯す冀くは江湖の志士相助け速に本會の事業を全ふせしめんことを茲に欽て聲明す

### ◎紀念館設立の目論見

- 一 紀念館は縦十二間横十間高サ六丈七尺の煉瓦構造とし館内を三層に分ち上部を繪畫室中部を參考室下部を官民共同俱樂部とす
  - 一 繪畫室は日本海黃海蔚山沖等の大海戦を描寫して館壁に掲げ永遠の紀念とす
  - 一 參考室は日露戦役の紀念となる可き物品を並列し尙海事に關する總ての圖書を備ふ
  - 一 紀念館は上記の目的に依り設立すと雖も有事必要の場合は何時にも鎮守府の用に供す
  - 一 紀念館敷地は佐世保市新公園を以て之に充つ
- ◎日露海戦記發行の目的
- 一 古今未曾有の大海戦として全世界を驚倒せしめたる日露戦後に於ける我海軍の偉勳を表彰し併て海軍思想の發展を期すにあり
  - 一 日露海戦記發行に就ては廣く有志の賛成を求め前記の目的を遂行すると共に其利益は悉く積て紀念設立の費用に充つ



紀念館縮圖

### ◎日露海戦記の刊行に就て

◎抑も本書は一昨年以來専ら材料の蒐集に努め特に海軍部内 有方家の贊助を得拮据經營二ケ年の後漸く刊行の運に至りしものなり 然るに世人動もすれば既に其機を失へりと爲し冷然看過し去らんとす如期は畢意事理を解せざる一部少数者の僻見と云ふの外なし 何となれば東西兩強國が互に百有餘萬の大軍を起して連戦二ケ年の間雌雄を争ひたる其大戦史を編纂するに僅々數ヶ月の短時日を以て完成すへき理由なければなり彼の戦後續々發行せし幾多の戦史が事實を探究するの遑なく専ら機に投せんとを而已焦慮して先を争ふ如きは個人營利の事業として止むを得ざるなり唯憾むらくは交戦當時尙秘密に付せられたる幾多の新事實は毫も世に紹介せられず反て誤謬の多からんことを 初の本會は陸海兩軍に涉り完全なる戦史を編纂せんことを企圖せしも少くも五ケ年の日子を費すに非ざれば到底不可能事たるを悟り遂に全力を海戦記に注ぎ訪問傳ふる所の誤謬を正し且つ隠れたる新事實は網羅して遺さず完全なる日露海戦正史として後世に傳へんことを期せり 隨て發行時機の如きは之を顧みるの遑あらず終に二星霜の後始て目的を達するに到りし所以なり若し其れ巧遅は拙速に如かずとする者あらば復何をか云はん大方の諸賢焉を諒せよ

## 海軍勳功表彰會

各新聞の評論は表面にあり

GB041  
83W55848 97

明明明明明明  
 治治治治治治  
 四四四四三三三三  
 十十十十九九九九  
 年年年年年年年年  
 六六四四十二七七  
 月月月月月月月月  
 三三三三三三三三  
 十五十五十五十五  
 日日日日日日日日  
 四四三三再再發印  
 版版版版版版  
 發印發印發印  
 行刷行刷行刷行刷

製複許不

發行所

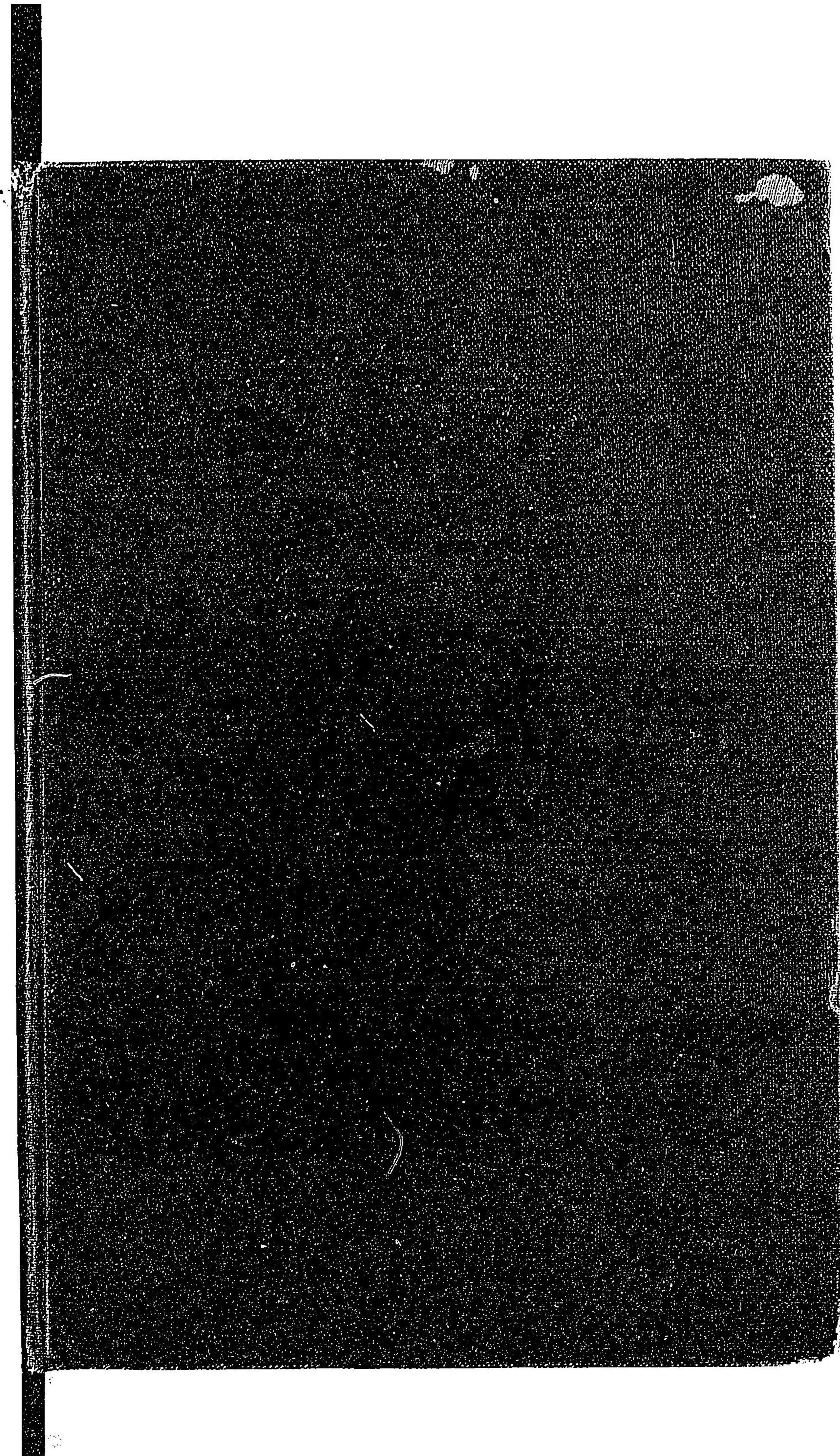
佐世保軍港

佐世保海軍勳功表彰會本部

東京市神田區駿河臺西紅梅町十一番地

佐世保海軍勳功表彰會支部

(東京市神田區中袋藥町秀光社印行)



GB441  
97

添 附 物  
地 図  
2 枚

300088-000-9

GB441-97

日露海戦記

佐世保海軍勲功表彰会 / 著

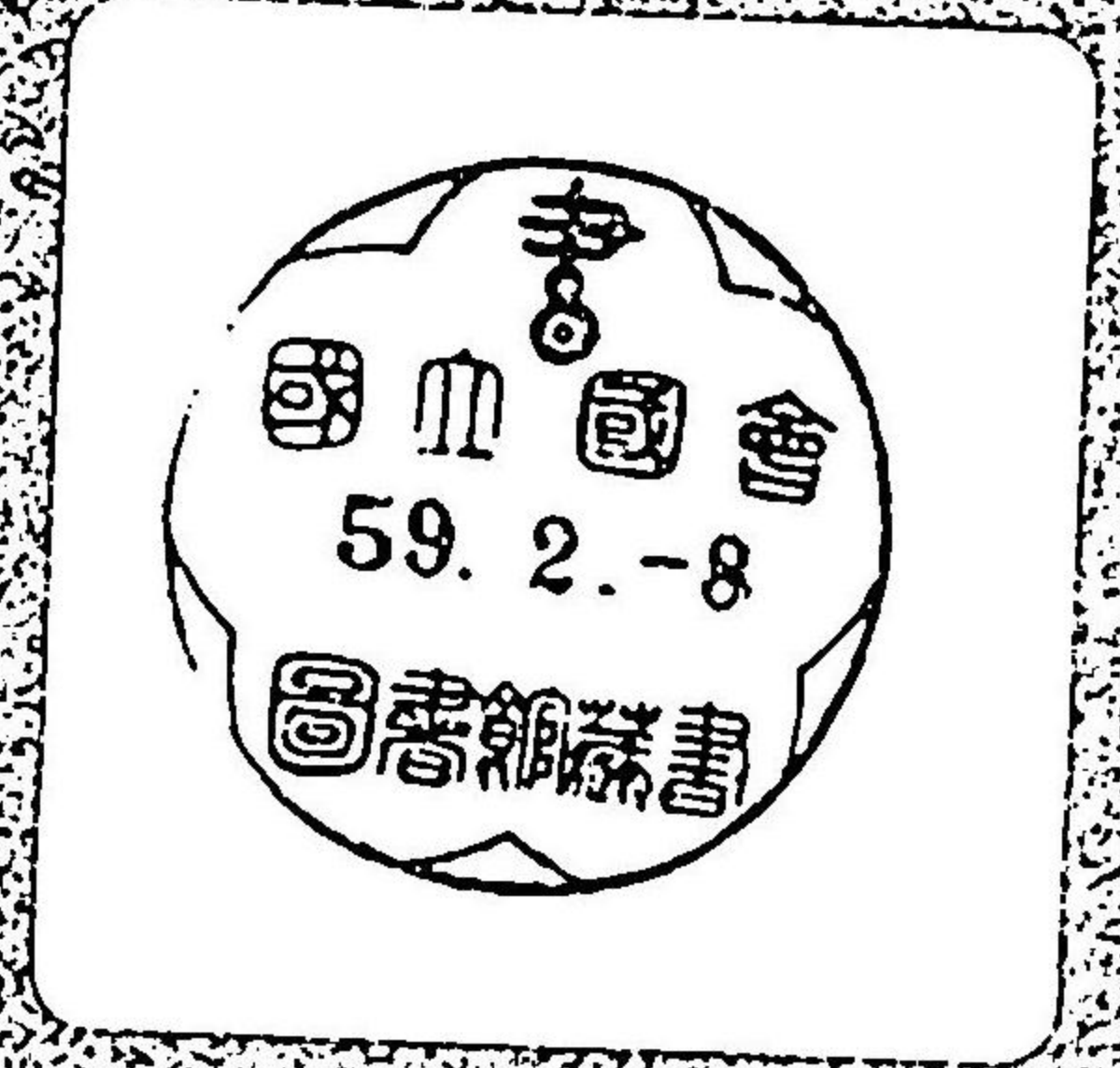
1 冊

1907. 6

ACB-0063



6844  
97



83W55848

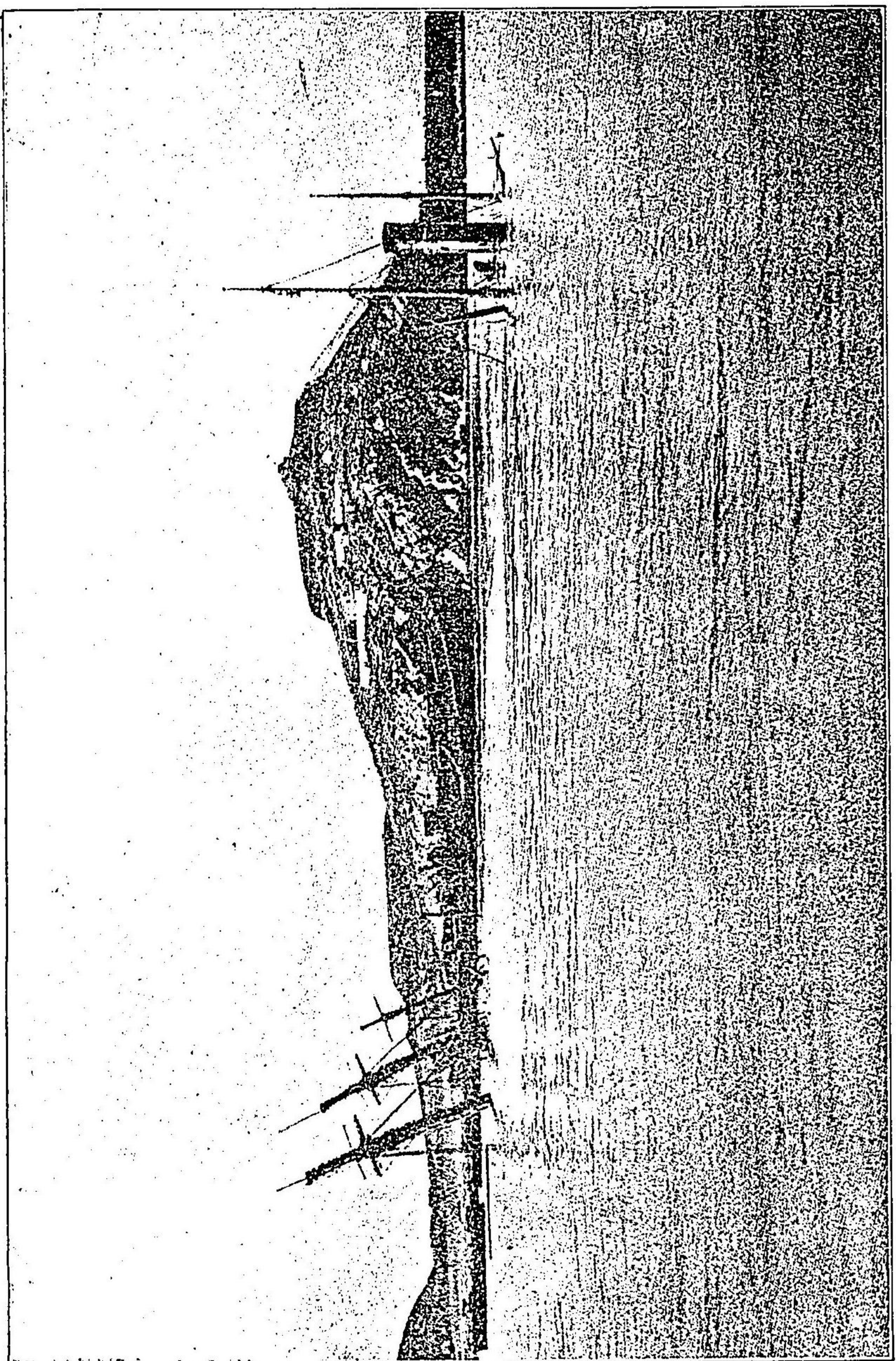
210.69

海軍勳章  
功表  
會已

海軍勳  
功表彰  
會已巳



旅順港口老虎尾半島前我團船塞艇沈没ノ状態



## 日露海戦記序

茲に佐世保市の友人某某等相謀り、海軍功勳表彰會なるものを起し、日露戦役に於ける我海軍軍士の勳功を表彰し、併せて之が記念館を設立し、長に其忠功武勳を闡揚せんが爲め第一着手として日露海戦記を編纂し、以て世に公にせん事を期し、稿成るに及んで序を予以徴す、乃ちて蕪辭を陳じ、之に應ずるに臻りし所以のもの。由來予と佐世保との縁因淺からざるに依る。

史を按ずるに、我祖第八世源久、八百三十八年を距てたる延久元年の昔、任ぜられて肥前國松浦郡宇野御厨檢校たるや、城を今福村の巍々濱邊の梶谷に築き、梶葉を家紋とす采田二千二百三十有餘町を領す、松浦の姓茲に於て始めて起る。

下つて第二十五世祖源隆信の時代となるや、群雄四方に割據し、永祿

戰鬪旗を掲ぐ。同十一時四十五分、敵艦を右舷ビームに見る。此時東郷司令長官は、幕僚と共に食卓に就き、三鞭酒を酌んとす。「敵艦隊見ゆ」との報あり、一同起て杯を舉げ、先づ「天皇陛下萬歳を三唱す。終りて長官は幕僚を随へ艦橋に上り、各艦に信號せしめて曰く、「勝敗の決は、此一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ」と。各艦の將卒皆勇み意氣大に振ふ。此時、第三戦隊も來り加はる。正午、旅順黄金山砲臺の下に敵艦隊を見る。敵艦隊の勢力は、戦鬪艦ベトロパウロスク、同ボルタワ、同セバスタポリー、同ベレスウイト、同ホヘータ、巡洋艦バヤーン、同デアナ、同アスコリッド、同ボヤーリン、同ノーウヰク、運送船アンガラ等にして、司令長官スタルク中將は、ベトロパウロスクに、司令官ウフトムスキー少將は、ベレスウイトに坐乗各艦を指揮して我艦隊を待つものゝ如く、東亞大守アレキセーフは、其幕僚と共に、黄金山砲臺に在りて、艦隊掩護の砲撃を指揮せり。

斯くて彼我艦隊の距離漸く一万米突に薄る。而して我艦隊の旅順港口を距る二万一千米突、黄金山砲臺より砲撃を開始せり。而も我は應せず。進むで彼我艦隊の距離七千米突より、八千米突の間に接近したる午後零時十分、敵艦は砲門を開いて射撃を始む。同十二分に至り、啊呷の機正に熟す。旗艦三笠は先づ砲火を開きたり。同十五分、第二戦隊旗艦出雲續いて砲撃す。各艦皆之に倣ひ、右舷の砲門を開く。敵は艦隊及黄金山、蠻子營の各砲臺より、烈しく

發砲し、彼我の砲聲轟々として海若驚き鬼神怖る。敵は昨夜我驅逐隊の夜襲に不意を打たれ、三艦を傷けられ、無念遣る方なかりしにや、殊更に亂射狂撃、砲彈の注ぐもの雨の如く、而も多くは照準を失して艦體に中らず。時に甲板上に落下するも、我堅甲を貫く能はず。唯彈片の飛散するあるのみ。我艦隊は益々猛進し、約三千五百米突乃至五千二百米突の最近距離に進みて港口に迫る。敵艦周章して、砲撃愈々亂れ、その始め一線に排列して、左舷砲を用ひたりしもの、艦形混亂して、漸く二列縦陣となり。兵氣甚だ揚らず。而かも砲臺の應援を待みて、盛んに砲撃を繼續しつゝあり。同廿七分、我が戦艦より放ちたる十二吋巨砲彈は、巡洋艦バヤーンの石炭庫に命中し、續いて又火藥庫に爆發す。バヤーン大火災を起し、敗走して港口に退く。敵艦にて最も能く戦ふ者は、ノーウヰクにして、次に戦艦ベトロパウロスクなりしが、皆大なる損傷を被りたり。巡洋艦アスコリッド、デアナの二艦も亦破損甚だし。同三十分、我諸艦は、一廻轉して左舷及後部の巨砲を以て、集彈猛撃す。敵艦遂に耐へず、砲撃を中止し、ノーウヰクを先頭として港口に退く。我は砲臺の砲撃を避けて深く追はず。同三十三分、打方止む。同五十分、老鐵山頂を北西約八哩に眺めつゝ、南東に退きたり。午後一時八分、等しく戦鬪旗を降下せり。夫より全艦相呼應し、凱歌を奏して歸途に就き。同八時四十五分、山東角の燈光を右舷真横に見つゝ進み、翌十日午後聯合艦隊は、韓國牙山の沖に投錨す。巡威島